

# 河内国府遺跡出土縄文時代 埋葬人骨周辺出土の遺物

山下大輔・渡邊貴亮・山口卓也

## 1. はじめに

関西大学博物館には、明治後半から昭和初めに大阪毎日新聞社の社長を務めた本山彦一（1853-1932）が蒐集した考古学資料、通称「本山コレクション」がある。本山コレクションは、江戸時代の神代石や神田孝平旧蔵資料など明治期の考古学・人類学の学史的資料が含まれることで注目されるが、本山彦一自身が自ら発掘した河内国府遺跡、長門鑄銭司、肥前有田古陶器窯の「三大発掘」の一括発掘資料についても高い資料的価値がみとめられている。

京都帝国大学教授濱田耕作、東京帝国大学講師鳥居龍蔵や多くの人類学者をはじめ、本山彦一自身の本山発掘隊により大正6（1917）年から発掘された大阪府藤井寺市河内国府遺跡では、縄文時代の人骨が埋葬状態で多数発見された。当時は人類学的な関心が高かったほかに、良好な大量発見例であったことも影響し、日本人起源論争にかかわる当時の人類学研究の一大イベントとなった。

本山コレクションに内包される河内国府遺跡の発掘資料は、京都帝国大学考古学教室員であった末永雅雄先生が作成した『本山考古室要録』（末永1935）（以下『要録』とする）に「石器時代遺物」の第三棚328から450まで、122件が登録されている。これらのほとんどは、本山彦一が大阪毎日新聞社をあげておこなった大正6（1917）年・7（1918）年の第3回・第4回発掘資料である。この調査で出土した縄文時代埋葬人骨には、玦状耳飾の装着や土器の副葬、抱石が認められ、縄文時代埋葬についての貴重な知見を得ることとなった。縄文鉢形土器や玦状耳飾、丸玉は重要文化財に、埋葬人骨の頭部を覆った縄文土器破片は重要文化財附に指定されており、これらはすでに資料化されている（関西大学博物館 1998）とともに関西大学博物館で展示公開されている。

『要録』には、そのほかにも「人骨と共に出土」や「人骨頭部被蓋」など縄文時代埋葬に伴う可能性のある遺物の登録がみられるほか、『要録』に登録のない一群も存在している。これらは登録情報の読み取りと現物参照に疑問があったため、今まで資料化・公開がなされてきていない。本稿では、関西大学博物館における収蔵状況から、当時の発掘状況を整理し新規に資料化した遺物を紹介するとともに、河内国府遺跡の知見を追加したい。

## 2. 国府遺跡の縄文時代埋葬人骨と遺物

『要録』の石器時代遺物第三棚334には、石鏃と石錐の合計3点が登録されている。備考には「石錐2個 第2号人骨・第7号人骨・14号人骨と伴出 大正6年7月」とある。335には石鏃・石錐

の合計13点が登録され、備考には「石鏃12、石錐1、第18・12・16・11・13・12号人骨付近出土」とある。これらの一部については、『要録』に図および写真が掲示されている。

人骨の番号は、本山彦一の発掘において人類学研究を担当していた大阪医科大学教授大串菊太郎（大串1920）の整理番号である。番号は大正6（1917）年の本山彦一第3回発掘で検出された15体の人骨と大正7（1918）年の第4回発掘で19体の人骨、計34体の通し番号に合わせて整理できるが、図・写真の個々の石器と人骨との対照は困難である。また、写真にない石器については他に登録されている石器と混在しており、抽出は困難である。

番号を整理すると、第3回発掘の第2号・第7号・第11号・第12号・第13号・第14号の6体の人骨に伴出したものと、第4次発掘の第16号（第4回1号）・18号（第4回3号）の2人骨に伴出したものが登録されていることになる。関西大学博物館では『要録』に登録されている334の3点、335の13点のうちの9点を確認している。



写真1 本山考古室要録 石器時代334・335の石器

さらに、本山コレクションの河内国府遺跡出土資料には、人骨発掘日時などの情報を筆書きした大正時代の新聞紙などに包まれて収蔵されている遺物が存在する。これらには「334」や「335」といった『要録』の登録番号が付された痕跡が見当たらず、これまで未整理のまま残されてきたものである。本資料群は1975年頃に関西大学文学部考古学研究室でおこなわれた再収納作業によって、個別に8つの封筒で保管している。以下にその状況を紹介するとともに、保管資料について概観する。



写真2 新聞紙による包みと出土遺物、保管封筒 田附勝氏撮影

#### 第四号 旧第一九号 封筒①

大阪毎日新聞大正7（1918）年3月16日号一面（中段右端）と二面（中段左端）広告の部分が破られて、土器片1点を包む。墨書きで「四号 旧十九号」、張り紙で「河内国府（衣縫） 第四回発掘（第三回は大正六年十月一日より十まで）大正七年四月一二日より五月十日まで」とある。「四号 旧十九号」は、第4回発掘の第4号人骨（旧は大串博士の通し整理番号19号）であると読み取れるので、新聞紙に包む際に大串発掘の通し番号から発掘回ごとの整理番号に直したことがわかる。

19は2条の刻目突帯を貼り付ける土器である。胎土には角閃石を含む。詳細な時期は不明である。

#### 第六号 封筒②

医海時報 第1245号 大正7（1918）年5月4日刊の、広告頁（47）（913）（48）（914）に土器片3点、石器8点を包む。墨書きに「国府六号 土器」とあり、封筒①に従えば、第4回第6号人骨（大串21号人骨）であることになる。

石器はすべてサヌカイト製である。2は半損品の尖頭器である。下端部に基部作り出しの二次加工がみられるため基部側とした。3・4・8・9は石鏃およびその未成品である。4については比較的加工が進んでおり、いわゆる鋏形鏃である。5は求心状に剝離を進めた石核から剝離した剝片である。6・7は石錐である。2点とも素材剝片の末端部を利用して二次加工を施し、機能部を作り出している。

20～22は縄文時代前期に属すると考えられる土器である。21は内外面ともにナデ調整が、21の外面には縄文が施文される。22にはC字形の刺突と斜縄文が施される。

#### 第七号 封筒④

大阪朝日新聞 大正7（1918）年3月16日号の（三）面右上の部分に包まれて、土器片2点がある。連載小説「維新英傑 高杉晋作」渡邊霞亭作が見える。裏面は（四）面左下の経済記事と

なる。墨書きで「第七号 大正七年四月」とあり、第4回発掘の第7号人骨（大串22号）であることが知れる。

23は外面ケズリ状のナデ、24はLRの縄文が施される。小破片であるため判然としないが、いずれも縄文時代前期の土器であろうか。

#### 第八号 封筒⑤

大阪朝日新聞 大正7（1918）年3月16日号の（一）面左下部分に、土器片1点を包む。墨書きで「第八号」とあり、第4回発掘第8号人骨（大串23号）であることが知れる。

25はRLの縄文を施した縄文時代前期の土器である。

#### 第十号 封筒⑧

大阪朝日新聞 大正7（1918）年3月16日の面の上段右側で大阪朝日新聞題字がある。土器片3点を包む。「第十号 爪形土器」と墨書があり、第4回第10号人骨（大串25号）であることが知れる。

26・27は爪形文と縄文が施された縄文時代前期の土器である。28は古墳時代の土師器であろうか。

#### 第十一号 封筒③

普通紙に土器片2点、石器2点を包む。表に墨書きで「第十一号 石鏃」、裏に「第十一号 石器」とある。封筒①に従えば、第4回第11号人骨（大串26号人骨）であることになる。

石器はすべてサヌカイト製である。10は長さ29.7mm、幅24.1mmの比較的大型の石鏃である。11は石鏃である。製作に伴う破損か使用に伴う破損か判断に迷うが、先端の剝離の状況から未成品の可能性が高い。

29・30は縄文時代前期の土器である。いずれも外面に単節の斜縄文が施される。

#### 第十四号 封筒⑦

大阪朝日新聞 大正7（1918）年3月16日の（一）面上段左に包まれて、土器片3点、石器7点がある。墨書で「第十四号」と記して、第4回発掘第14号人骨（大串29号）であることが知れる。

石器はすべてサヌカイト製である。12・13・14・17・18はすべて石鏃未成品である。16はやや大型の石鏃未成品であると考え、下部の二次加工に基部を作出するような剝離痕がみとめられるため、「石鏃か」としている。縄文時代草創期のなかでも比較的古い時期に類似する形態の有茎尖頭器がみられるが、本品はおそらく石鏃の初期加工段階のものであろう。15は石鏃である。本品の先端部および表面左側の稜が全体的に摩滅している。使用に伴うものであるか、堆積環境によるものか判然としない。

31・32は縄文が施される縄文時代前期の土器である。33はナデ調整の土器で、小破片のため判然としないが、縄文時代の所産であろうか。

#### 第十五号第十九号 封筒⑥

医海時報 第1245号の（九）（十）面に、墨書で表に「第十五号第十九号」裏に「第十五号第十九号 土器と銭」と記すが、鉄製品のみが遺存する。第4回発掘第15号（大串30号）19号（大串34号）であることが知れる。

1は重量3.51g、直径約25mmの円形で、中央に直径約4.5mmのやや方形を呈する小孔を有する鉄



写真3 第4回発掘第3（大串18）号人骨

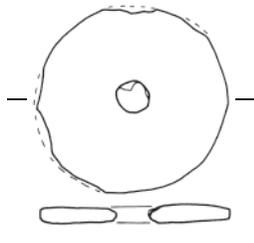


図1 鉄製品実測図



写真4 鉄製品写真

表1 国府遺跡人骨周辺鉄製遺物表

人骨番号	封筒番号	番号	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
十五・十九号人骨	⑥	1	鉄製品	24.0	26.0	3.7	3.51

製品である。錆による劣化が著しく、表面・裏面ともに観察は困難である。錆の状況から材質は青銅ではなく鉄である可能性が高い。「土器と銭」の記載があるので、当時「鉄銭」として取り上げられたものであろう。錆のため、詳細な情報を読み取ることが難しく、「鉄銭」である可能性も考慮する必要があるものの、おそらく別のものであろう。

以上、封筒に整理された新聞紙包からは、第4号人骨以降の登録番号の「伴出」した石器や土器片などが「発見」され、第3回のもは含まれていなかった。一方、『要録』に登録された334・335の人骨付近の石器には、第3回の人骨と第4回に発掘された3号人骨（通して18号人骨）までを含んでいる。

これらの状況から推測してみると、昭和の本山考古室開設時、末永雅雄先生の手による本山コレクションの整理と『要録』への登録が、このような新聞紙などに包まれた資料うち、第3回発掘のすべてと第4回の第3号人骨部分まで行われた時点で中断し、残りが未登録のまま残された

可能性が考えられるであろう。第4回第3号人骨胸部上の縄文鉢形土器は、『要録』の石器時代第3棚352に、人骨頭部を覆うように出土した土器破片は354と358に登録されている。この第4回第3号人骨に伴う出土遺物は、重要文化財に指定されている深鉢形土器が著名であるが、それ以外の遺物についてはこれまであまり触れられてこなかった。そこで、人骨頭部を覆うように出土したとされる土器破片についても図化を行い、ここに紹介することとしたい。

図5の34～43が当該資料であり、いずれも縄文時代前期の北白川下層式に該当するものと考えられる。外面に羽状縄文を施すものが多い。別個体と考えられる資料も含まれていることから、これら全ての破片資料が人骨に伴うものなのかの判断は難しい。内面に「河内国府衣縫人骨被覆」と朱書きされた資料も見える。『要録』の番号が注記されたものが多く、いずれも358と記される。

今回の8枚の新聞紙などの包みの墨書きには、第4回発掘の4号・6号・7号・8号・10号・11号・14号・15号と19号があり、大串博士の整理番号19号・21号・22号・23号・25号・26号・29号・30号と34号に相当することが判明する。その結果、連続した人骨番号でありながら、『要録』の334・335に続いて登録されるはずの、脱落した人骨伴出資料を復元できたと考える。

人骨伴出単位で遺物を取り上げたのは、本山発掘隊が人骨と遺物の関係を、「考古学」的にとらえていたことを示すものであろう。ただ、正確な出土位置関係が記録されていないので出土状況を確認できず、副葬品かどうかの評価は困難である。

### 3. おわりに

今回紹介した縄文時代埋葬人骨伴出遺物の包みからは、発掘隊の「その日その日」が垣間見えたことは興味深いので追記しておきたい。

本山彦一の数次にわたる河内国府遺跡の発掘は、大阪府藤井寺市道明寺天満宮を宿舎として行われた（南坊城2005）。第4回の発掘は、4月10日から5月10日まで行われた。日々の発掘遺物の洗浄と注記もここで行われたらしい。本稿で資料化した新聞紙からは、出土遺物洗浄後に各人骨周辺の取り上げ遺物の散逸を防ぐために、人骨番号を墨書きして包む整理方法が看取できる。珞状耳飾や完形縄文土器などは検出時に注目され、整理の際にも別途扱われたのであろう。

新聞紙包みには、第4回発掘調査開始の1か月ほど前の3月16日付の大阪朝日新聞が引き裂かれて使われている。大阪毎日新聞でないことに興味を引かれるが、道明寺天満宮の購読紙であったのかもしれない。紙面には、第4回発掘時の大正7（1917）年の国際面、経済面、社会面、広告が残っており、当時の世情を伝える。

医海時報第1245号、大正7（1918）年5月4日刊は、河内国府遺跡発掘にかかわった医学者である大阪医科大学教授大串菊太郎の購読紙であったのだろうか。直近の購読専門学術紙を携えて発掘調査宿舎に滞在していたこと、それを裂くことに躊躇なかったことから、調査終盤に人骨周辺の精査や取り上げが大串博士の手で行われたことを示す証拠といえるかもしれない。

本稿では、このように人骨単位で取り上げられ、新聞紙を用いて整理された出土遺物を検討してきた。土器については縄文時代前期後半の北白川下層式期の資料が大部分を占めるものと考えられるが、小破片が多く細分型式まで比定することは難しい。このように小破片である上に出土点数も少なく、明らかに時期の異なる土器も含まれていることから、これらが人骨に伴う副葬品

と認定することは困難といえよう。

出土石器についても、同じ人骨周辺から出土した資料の中にも時期幅が認められるものがあることから、土器と同様に確実に人骨に伴う資料を抽出することは困難である。また、石器資料の大半は器面に摩滅を受けており、その堆積環境は良好であるとは認めがたい状況にある。

人骨が検出された縄文期の遺構面が、古墳時代前期には既に大規模に掘削されていたことから、人骨と出土遺物の確実な共伴関係を主張するには根拠に乏しい。しかし、先に触れたように、人骨と遺物の関係を考古学的に把握しようという試みが読み取れることは重要であろう。当時、本山発掘隊が「考古学的」な調査を実践していたことを示す貴重な記録である。出土状況の詳細な記録がないことが惜しまれるが、遺構と遺物、あるいは出土遺物同士の関係を出土状況から導き出そうとする姿勢は、今日的にみても大きな意義があるといえよう。

本稿は1. および2. の新聞記関係の記載を山口が、2. の縄文土器関係の記載、製図、写真を山下が、2. の石器・鉄製品の記載、製図、写真を渡邊が作成し、3. は著者全員の意向を集約して山口・山下が執筆した。本稿における石器および鉄製品はすべて等倍で掲載している。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、伊藤信明氏、田附勝氏、文珠省三氏には多くのご教示をいただきました。末筆ではありますが、ここにご芳名を記し、深謝いたします。

#### 【参考文献】

- 天野末喜 2001「河内国府遺跡における縄紋墓地と集落」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XVI』藤井寺市教育委員会
- 池田次郎 1988「河内・国府遺跡の人骨」『橿原考古学研究所論叢』10 奈良県立橿原考古学研究所
- 岩井擁南 1917「河内国府遺跡調査一～二十」『大阪毎日新聞大正6年10月15日～31日』
- 岩井擁南 1918「河内国府遺跡第四回発掘調査一～一八」『大阪毎日新聞大正7年8月1日～9月9日』
- 大串菊太郎 1920「津雲貝塚及国府石器時代遺跡に對する二三の私見」『民族と歴史』第3巻第4号
- 関西大学博物館 1998『博物館資料図録』関西大学
- 末永雅雄 1935『本山考古室要録』富民協会
- 濱田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第4冊
- 南坊城光興 2005「国府遺跡発掘と道明寺天満宮」『阡陵』No.50 関西大学博物館

表2 国府遺跡人骨周辺石器一覧表

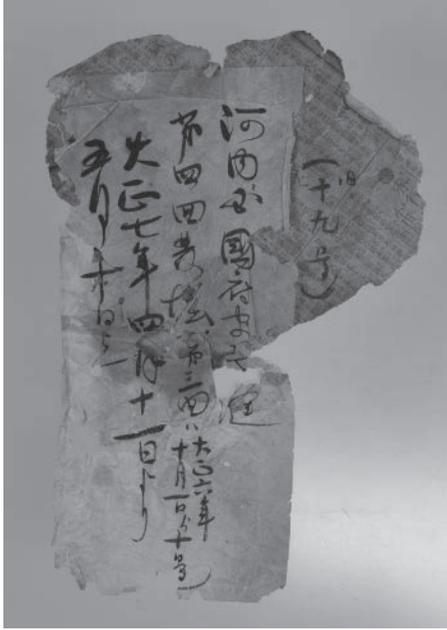
人骨番号	封筒番号	番号	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	備考
六号人骨	②	2	尖頭器	70.8[+]	23.9	11.1	18.69	サヌカイト	基部側
		3	石鏃	18.9	15.6[+]	3.0	0.87	サヌカイト	未成品
		4	石鏃	14.3[+]	15.2	2.3	0.42	サヌカイト	鍬形鏃
		5	剥片	13.5[+]	17.3	2.4	0.51	サヌカイト	
		6	石錐	30.4	15.6	4.4	1.65	サヌカイト	未成品
		7	石錐	24.8[+]	12.4	4.1	1.17	サヌカイト	
		8	石鏃	22.2[+]	17.1	2.8	0.94	サヌカイト	未成品
		9	石鏃	24.2[+]	14.4[+]	3.1	0.87	サヌカイト	未成品
		十一号人骨	③	10	石鏃	29.7	24.1	6.1	5.08
11	石鏃			21.4[+]	14.5	3.8	1.14	サヌカイト	
十四号人骨	⑦	12	石鏃	27.2[+]	16.6[+]	3.4	0.94	サヌカイト	未成品破損
		13	石鏃	22.2[+]	13.5[+]	2.3	0.67	サヌカイト	未成品破損
		14	石鏃	17.6[+]	17.2[+]	3.2	0.89	サヌカイト	衝撃剥離痕
		15	石錐	40.0	14.1	5.8	2.74	サヌカイト	
		16	石鏃か	27.2[+]	26.7[+]	4.6	2.93	サヌカイト	未成品
		17	石鏃	24.7	15.4	2.2	0.80	サヌカイト	未成品か
		18	石鏃	19.6[+]	20.9	2.2	0.73	サヌカイト	

番号は図・写真及び本文と対応 表中の〔+〕は欠損を表す

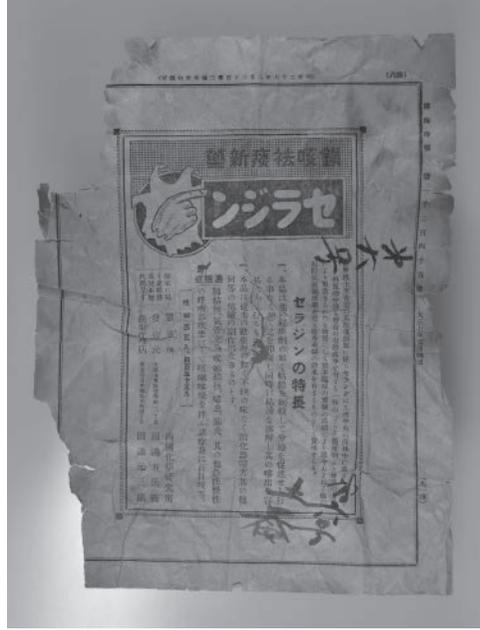
表3 国府遺跡人骨周辺土器一覽表

人骨番号	封筒番号	番号	種類	調整(外面)	調整(内面)	色調(外面)	色調(内面)	重量(g)	胎土	備考
四号人骨	①	19	縄文土器か	刻目突帯	ナデ	灰色	灰色	13.00	角閃石含む	裏面に「第四号人骨出土」朱書有
		20	縄文土器	ナデ	黒褐色	黒褐色	6.85	白色鈹物含む	縄文前期か	
		21	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	灰色	灰色	4.32	角閃石・白色鈹物含む	縄文前期
六号人骨	②	22	縄文土器	縄文(LR) C字刺突	ナデ	黒褐色	茶褐色	3.93	白色・黒色鈹物含む	縄文前期
		23	縄文土器か	ケズリ状ナデ	ナデ	赤褐色	黒色	10.18	角閃石・白色鈹物含む	
七号人骨	④	24	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	黒灰色	黒灰色	3.14	精緻	縄文前期
八号人骨	⑤	25	縄文土器	縄文(RL)	ナデ	黒褐色	黒褐色	6.71	精緻	縄文前期
		26	縄文土器	爪形文	ナデ	灰褐色	灰褐色	5.60	角閃石・白色鈹物含む	縄文前期
十号人骨	⑧	27	縄文土器	爪形文 縄文(LR)	ナデ	茶褐色	茶褐色	5.40	雲母・角閃石含む	縄文前期
		28	土師器か	微隆起線	オサエ	橙色	橙色	2.27	精緻	
十一号人骨	③	29	縄文土器	縄文(RL)	ナデ	黄橙色	灰色	11.34	白色鈹物含む	縄文前期
		30	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	灰褐色	灰褐色	5.17	白色鈹物含む	縄文前期
十四号人骨	⑦	31	縄文土器	縄文(RL)	ナデ・オサエ	茶褐色	黒褐色	3.88	長石含む	縄文前期
		32	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	灰褐色	灰褐色	2.94	長石含む	縄文前期
		33	縄文土器か	ナデ	ナデ	黄褐色	灰褐色	1.67	長石含む	縄文前期か
十八号(第四回三号)人骨	—	34	縄文土器	羽状縄文	ナデ	黄灰色	黒褐色	73.39	白色鈹物含む	縄文前期 内面に「河内国府衣縫人骨被覆」朱書有
		35	縄文土器	羽状縄文	ナデ	黄褐色	灰褐色	34.32	長石含む	縄文前期
		36	縄文土器	羽状縄文	ナデ	灰褐色	灰褐色	28.11	長石含む	縄文前期
		37	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	灰褐色	黒褐色	18.32	角閃石・白色鈹物含む	縄文前期 内面に「河内国府イヌヒ人骨被覆」朱書有
十八号(第四回三号)人骨	—	38	縄文土器	羽状縄文	ナデ・オサエ	黄褐色	黒褐色	15.94	角閃石・白色鈹物含む	縄文前期 内面に「国府」朱書有
		39	縄文土器	羽状縄文	ナデ	灰黄褐色	黄褐色	16.82	長石含む	縄文前期
		40	縄文土器	羽状縄文	ナデ	黄褐色	茶褐色	11.47	白色鈹物含む	縄文前期
		41	縄文土器	縄文(RL)	ナデ	灰褐色	灰褐色	16.94	黒色鈹物を含む	縄文前期
		42	縄文土器	縄文(RL)	摩耗	灰色	灰色	24.45	白色・黒色鈹物含む	縄文前期
		43	縄文土器	縄文(LR)	ナデ	灰褐色	灰褐色	31.78	白色・黒色鈹物	縄文前期

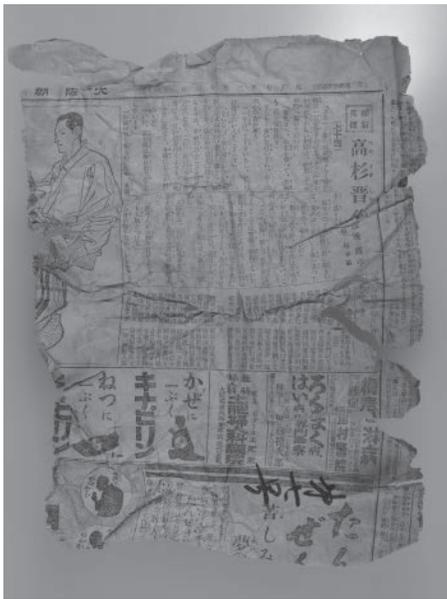
番号は図・写真及び本文と対応



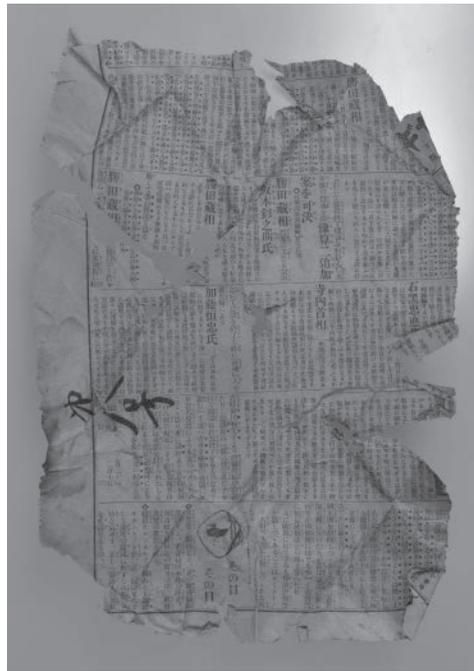
第四号旧十九号 封筒①



第六号 封筒②



第七号 封筒④

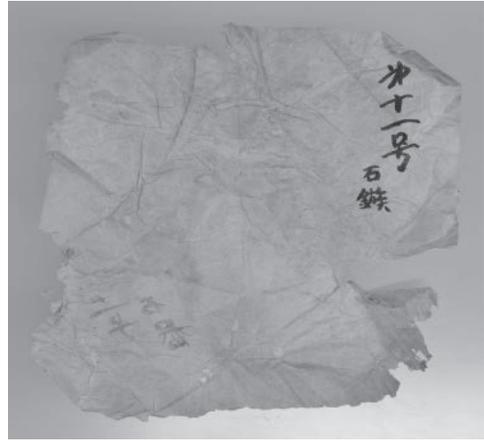


第八号 封筒⑤

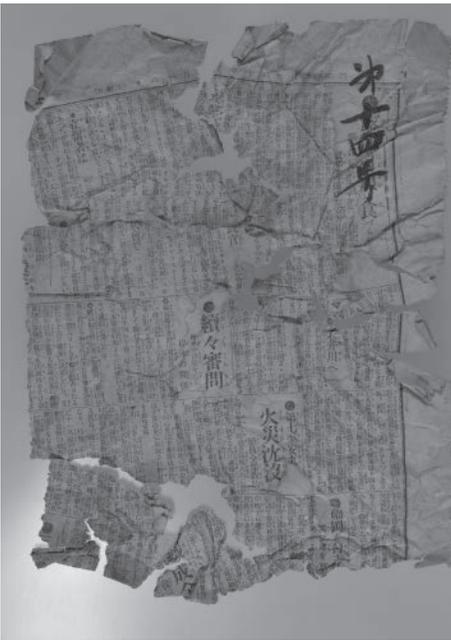
写真5 遺物を包む新聞紙など



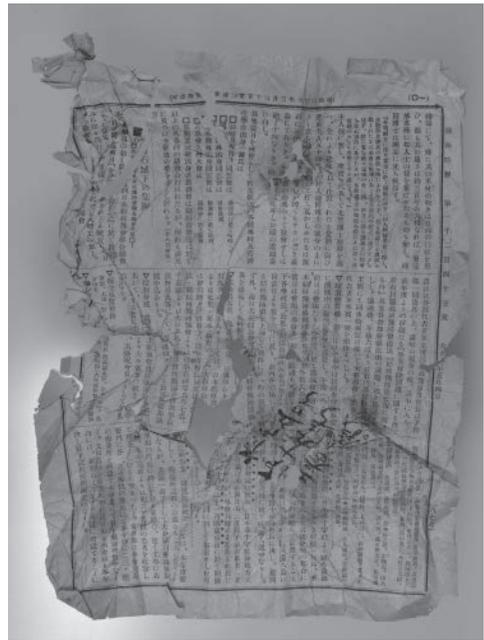
第十号 封筒⑧



第十一号 封筒③



第十四号 封筒⑦



第十五号・第十九号 封筒⑥

写真6 遺物を包む新聞紙など2

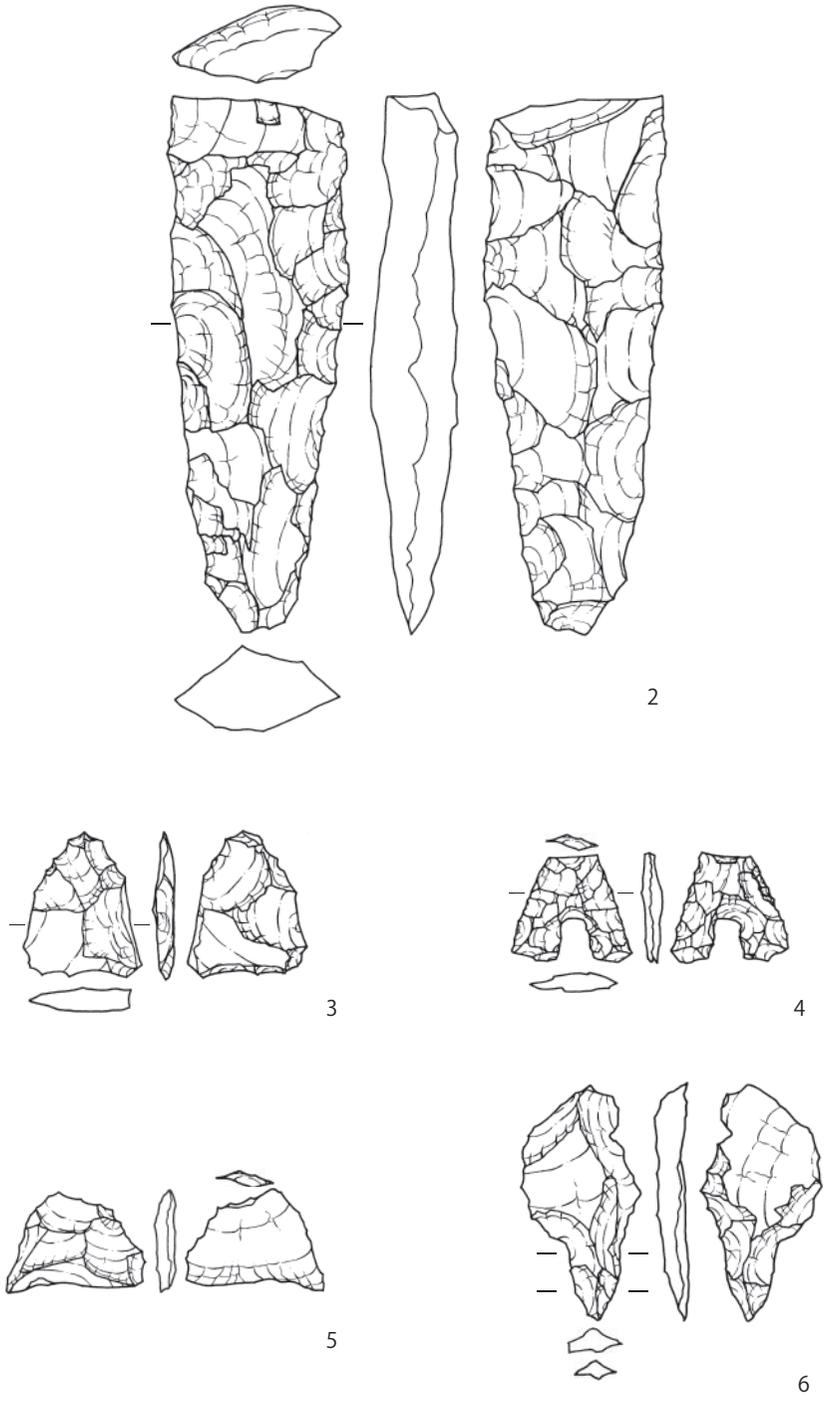


图2 国府遺跡人骨周辺石器実測图1 (S= 1/1)

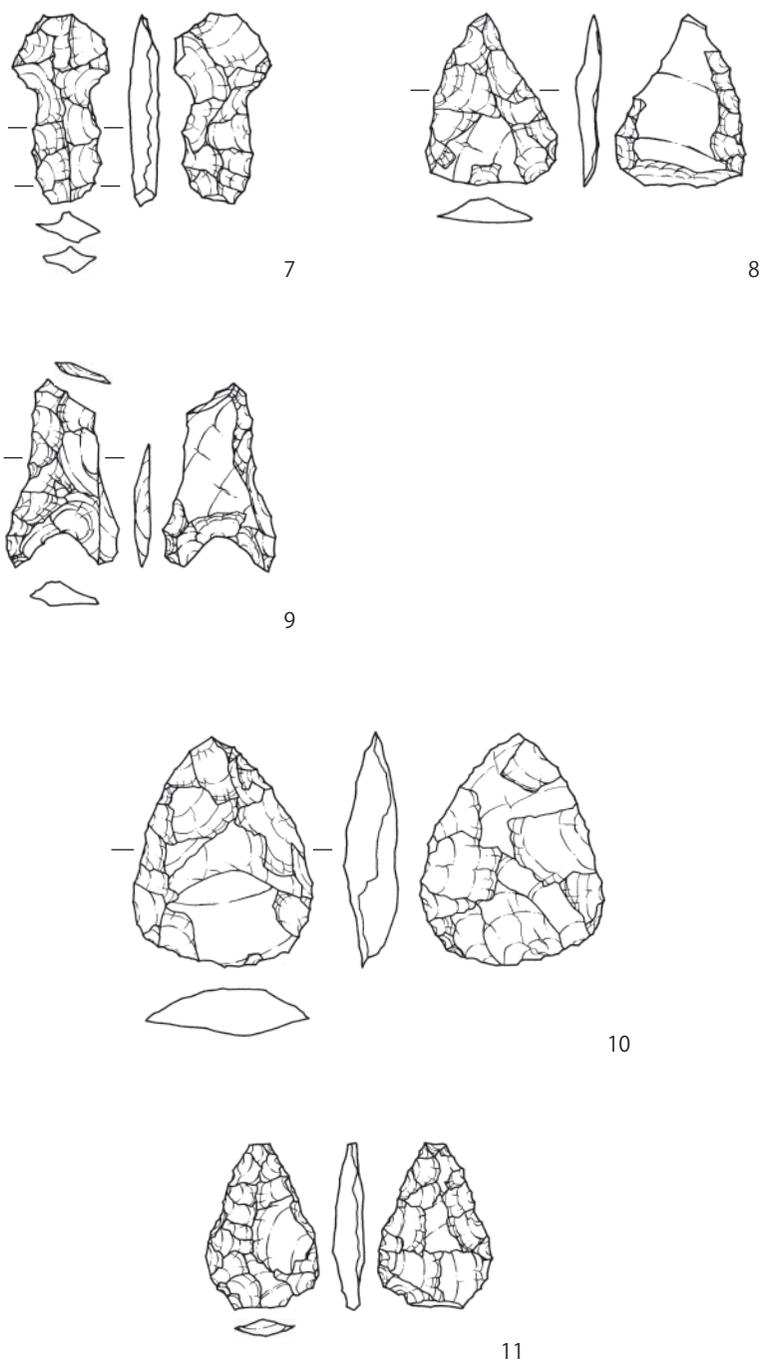


图3 国府遺跡人骨周辺石器実測图2 (S= 1/1)

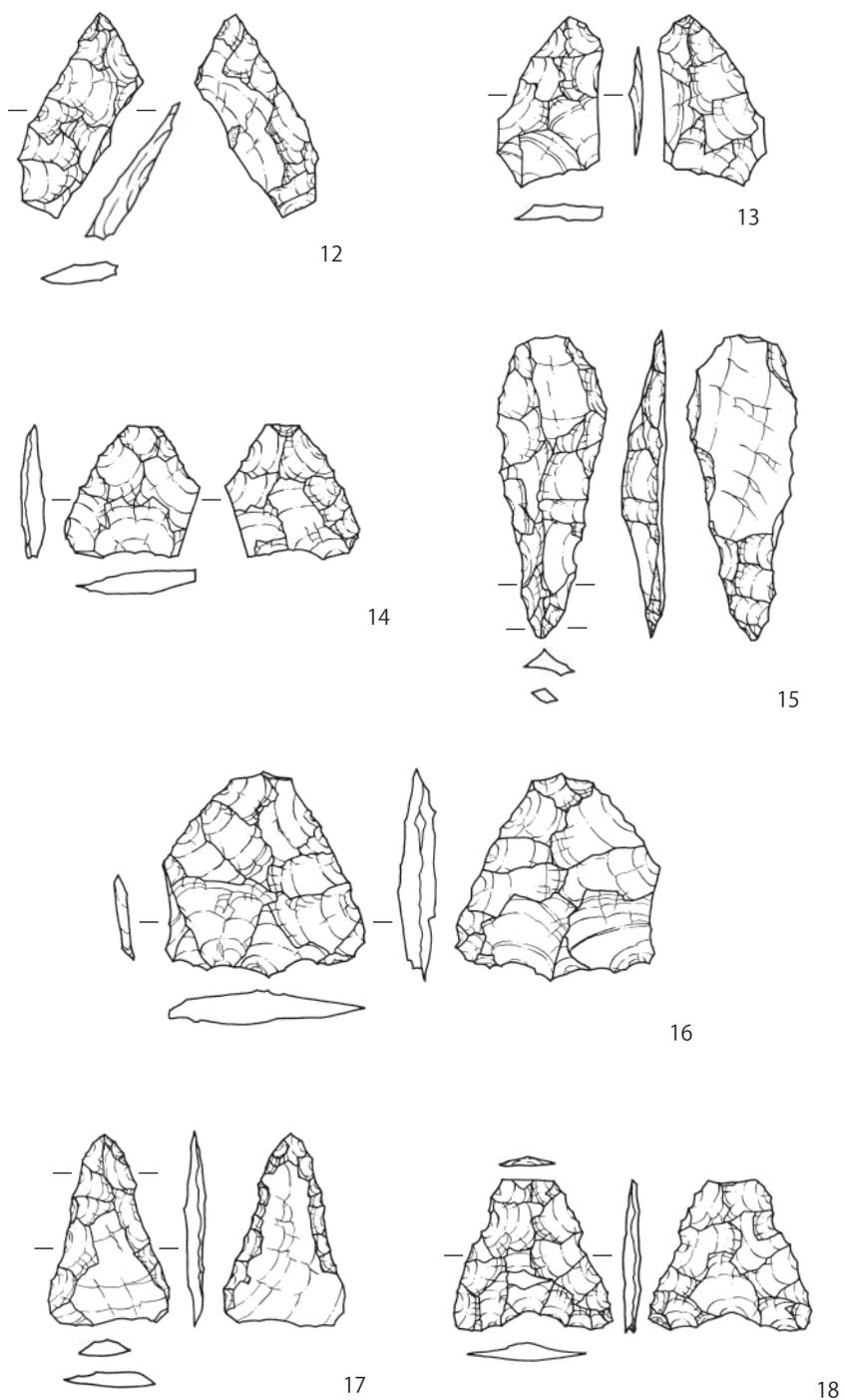


图4 国府遺跡人骨周辺石器実測图3 (S=1/1)

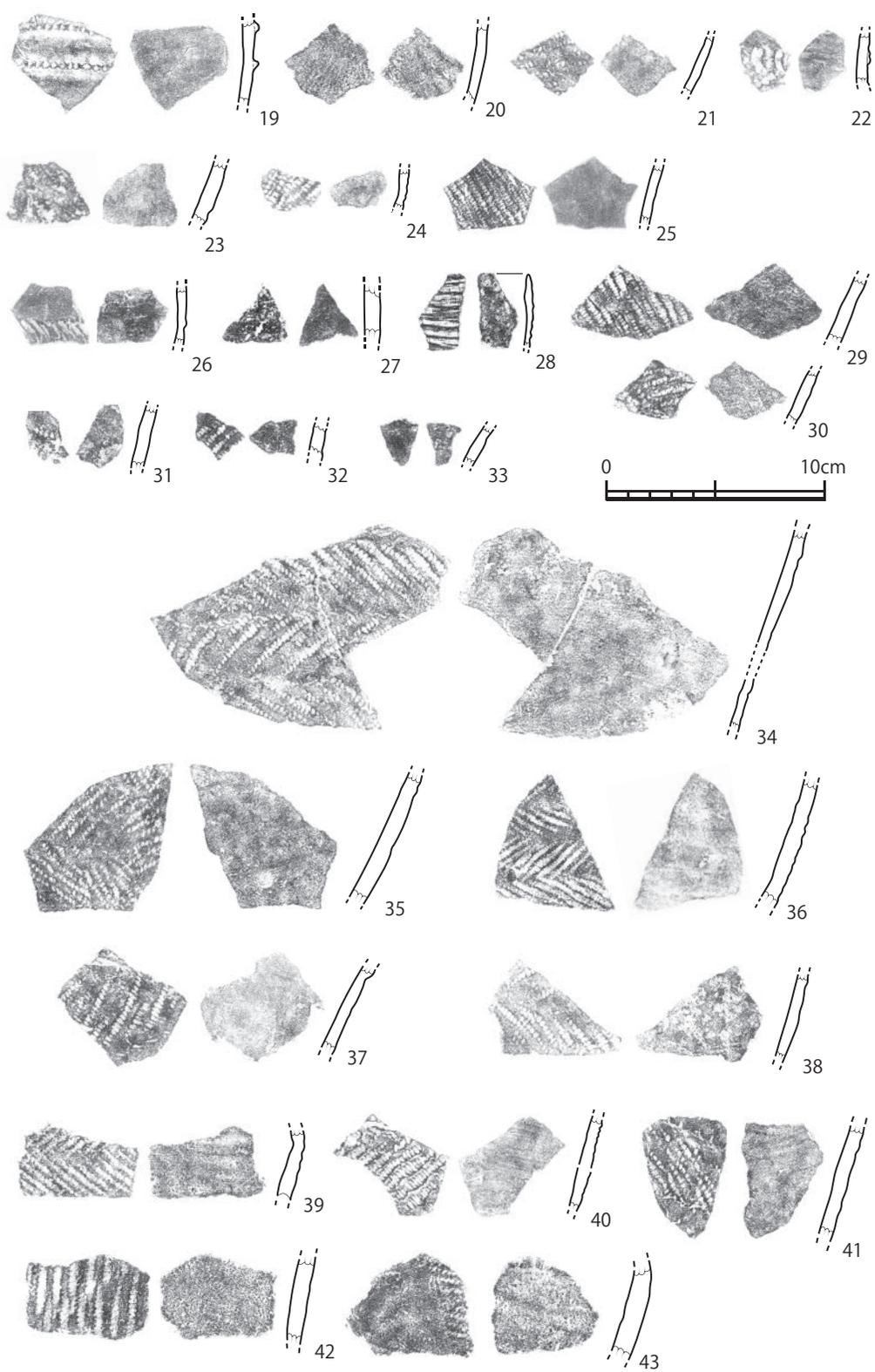


图5 国府遺跡人骨周辺土器実測図 (S= 1/3)

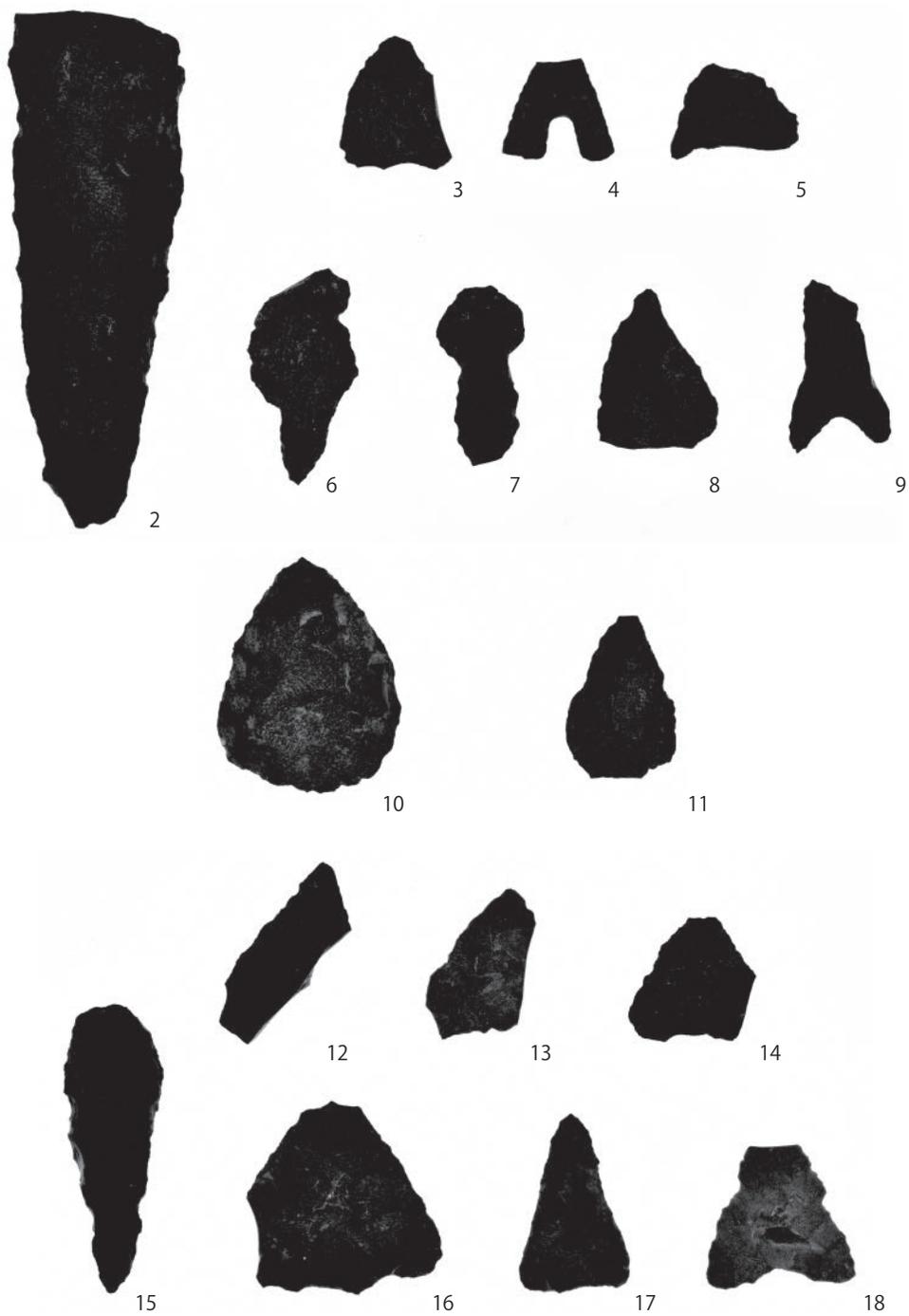


写真7 国府遺跡人骨周辺石器写真 (S= 1/1)

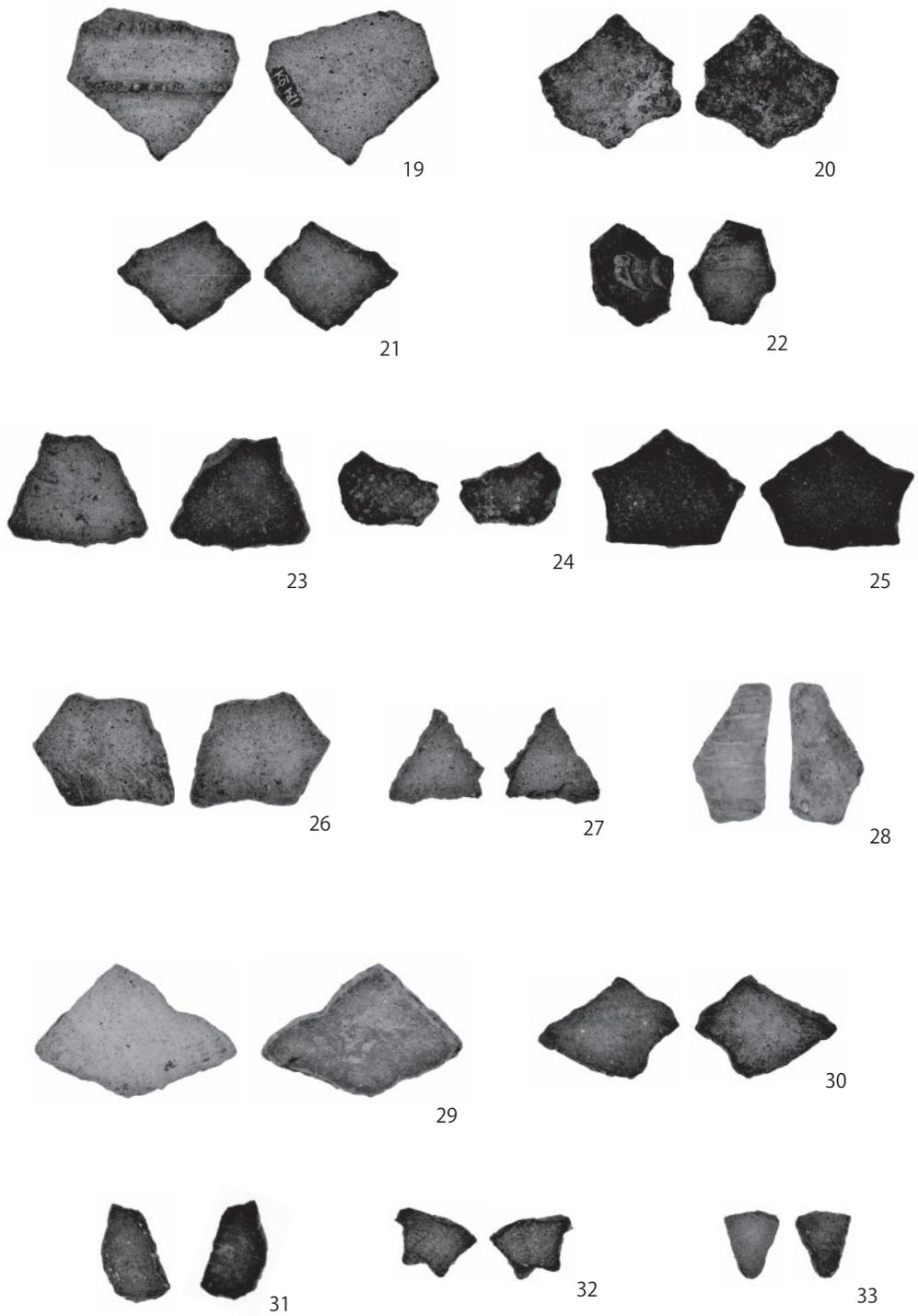


写真8 国府遺跡人骨周辺土器写真1 (縮尺任意)



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43

写真9 国府遺跡人骨周辺土器写真2 (縮尺任意)